

一般社団法人日本小児歯科学会
専門医セミナー「子どもの虐待」参加者へのアンケート調査
報告書（ホームページ版）

—子どもの虐待事例、収集のお願い—

今回のアンケートの中で、「子ども虐待」や「通報あるいは相談」の事例を知りたいとの声が数多くありました。事例を知ることで、さらなる気づきや疑わしいときの対応がスムーズに行えると思われま

す。先生方の事例を集めて、学会として情報発信したいと思います。ご経験のある先生は、学会ホームページの「コミュニティサイト」に投稿するか担当理事（eiichi-25@nifty.com）まで、是非ご連絡下さるようお願いいたします。

○はじめに

子ども虐待に関わる、悲痛なニュースは後を絶たない。一方、児童相談所で一時保護中の子どもなどについて、実の父母の親権より、児童相談所長や施設長の権限を一部優先させるような法整備を厚労省がすすめるなど、社会全体で子どもを守ろうとする動きが出てきている。

学会では、昨年、専門医を対象に「子ども虐待に関する意識調査」を行った。その結果は、学会ホームページに公表した。多くの小児歯科専門医が「子ども虐待」に関心を持っていること、日常診療や地域活動の中で、疑わしい事例に遭遇したりする機会が少なくないことが明らかになった。しかしながら、確実な判断に至らず、相談や通告を躊躇している実態も浮かび上がった。子どもを虐待から守るためには、小児歯科医が積極的に相談や通告を行えるよう、意識改革や知識の向上を図ることも重要と思われた。

○目的

意識調査の結果を踏まえて行われた、昨年の専門医セミナー「子ども虐待」の参加者を対象に、今後の学会としての取り組みを考える資料とすることを目的に、受講したことで「子どもの虐待」に対する意識がどのように変化したかを中心にアンケート調査を行った。

○結果

- ・専門医セミナー受講者 269 名を対象とした。回収数は 214 名（79.6%）であった。
- ・回答者の年代は 40 代と 50 代で 68.7%を占め、資格では専門医が 76.2%であった。
- ・受講したことで「意識が高まった」77.6%、「役割を認識できた」78.0%とセミナーの必要性が示唆された。
- ・日常臨床や地域保健の場で「子ども虐待」を意識する機会が増えそうと回答した者が

74.8%と多く、さらには通報あるいは相談しようと思うようになったとした者も78.5%いた。遭遇したときの対応をよりの確なものするためにも、継続的な啓発が重要であると思われた。

- ・小児歯科医の果たすべき役割について「大きい」あるいは「少し大きい」とした者が93.9%と多かった。その役割として「早期発見や介入」をあげた者が71.0%で最も多かったが、「育児支援を通じての虐待予防」を指摘した者も56.1%いて、小児歯科としての関わり方の多様性も指摘された。
- ・その他の自由記載では、子どもを口の中だけでなく幅広く観察し、見守っていくことの重要性や地域の中で連携をとることが大切との回答があった。学会への要望として、継続的なセミナーの企画や、ガイドラインや事例集の作成、法律家を初めとした関連する他職種との交流や連携もあげられた。

○まとめ

今回の結果から、学会員への講習会という働きかけが「臨床や健診の場での気づき」といった意識の向上や「相談や通告」といった行動をおこしやすくするのに有効であると考えられた。専門医セミナーや学会等で継続的に啓発を続けることが、学会の公益的役割として必要であろう。

小児歯科医の担う役割の大きさを、多くの小児歯科医が理解していることが明らかになった。このような実態を他の職種が認識することは、連携の推進に役立つことと考えられ、学会として情報発信していくことが重要と考えられる。

小児歯科医は、成長発達を理解した上での継続的な管理を実践している。さらには、生活背景なども含めた全人的視点から子どもを視ることを日頃から行っている。こうした小児歯科医の特性を、子どもの虐待にかかわる多くの人たちに理解してもらうよう活動することも責務であろう。

○自由記載の回答から

- ・いつでもどこでも子供に接する機会があれば（小児歯科医という枠を越えて）気づくことができると思う。そして歯科的にさらに確認できると思う。
- ・開業医と地域との関係の中で通報することは、信頼してきてくれている患者さんに対して（祖父母、親は放棄中）本当に通報までしていいのかわかりません。歯科医として義務としてはしかたないこととは思いますが・・・命に関わる様な場合は別ですが。
- ・小児歯科学会の会員のなるべく多くの方が、このテーマの講習会を受けられるように講習会を設けて下さい（大都市での開催・頻会の開催）
- ・具体例の提示をお願いしたい。実際に通報に至った例の背景・状況・時間的経過。我々のような若い世代にとっては、大変参考になると思われます。これまで症例報告・発表をまとめてもらうだけでもいいかもしれません。